

十八史略

帝堯陶唐氏帝學子也

其仁如天其知如神 就之如日望之如雲

都平陽 堯堯不剪土階三等

治天下五十年 不知天下治與不知樂

億非願戴己與不願戴己與

問左右不知 問外朝不知 問在野不知

乃徵服游於康衢

聞耆謠曰女我悉民莫匪爾極

不識不知順帝之則

有老人言嘯鼓腹擊壤而歌曰

日出而作日入而息

擊井而飲耕田而食

帝力何有於我哉

人々が帝を慕うこと、万物が太陽を仰ぐこと、
人々が帝を仰ぐこと、早天に福徳を待たぬことを待たぬこと。

愚民 = 万民
鼓腹擊壤

帝若は民を陶唐と云ふ。帝堯の息子である。その慈愛の大きいこと天か万物を養ふ
ようである。その知恵の優れたところは神のように行き渡っていた。都を平陽に置いた。帝堯は
某書等に草は伸び放題、床も低い粗末な屋敷だった。帝堯はこれを見て、國を治めて五年経った。
億兆の民はこれ以上私を帝位に就かざることを願うことだ。私の政治に不満はないだろうか。
大臣は尋ねてきたが、判りません。諺に「國の大儀はも尋ねてきたが判りません」とある。帝堯の外は、
者に尋ねても同じ返事だ。それならば、身と心とを一つに庶民になり、そして帝は衛入を止めた。
子供が覗きこむのが厭う。私に七万民の慕いを受けて下すことには、あんなに嫌なことはない。使のおか
ず。知事知事といふ者も、帝の威徳に感服して、一人の老人がなにかを言っている。
腹をつみ打ち、足の地面を打って拍子を取り、歌をうたうのが厭うた。「日は昇れば仕事とし、日は落
れば休む。井戸を掘って水を飲み、畑を耕して飯を食ふ。帝の威力は家系をなすものではない。」

詩經 より

1 關雎

關雎 二 鳴 雎 鳩 二 在 河 之 洲

關關雎鳩 在河之洲 窈窕淑女 君子好逑

關關雎鳩 在河之洲 君子好逑

カンカンとみぎこが鳴いて 黄河の中洲に階がた しのびながら寝てま 昔者よ申してかなんつれ合の

相愛のつれ合の 相愛のつれ合の

參差荇菜 二 流 之 左 右

參差荇菜 左右流之 寤寐求之 寤寐思服

左右流之 寤寐求之

高く低く伸びるあやこも 左に右に流れている しをりながら寝はん 寝ても醒てもあやこを思ふ

左に右に流れている 左に右に流れている

寤寐求之 寤寐思服 輶轉反側 寤寐求之

寤寐求之 寤寐思服 輶轉反側

寤寐思服 輶轉反側

おのれも醒ても得られぬとて 寝ても醒てもあやこを思ふ 寤寐しては悦び愛にてはぬ 寤返りばかり打つことな

おのれも醒ても得られぬとて 寝ても醒てもあやこを思ふ

琴瑟友之 琴瑟友之 鐘鼓樂之 鐘鼓樂之

琴瑟友之 鐘鼓樂之

琴瑟友之 鐘鼓樂之

高く低く伸びるあやこも 右に左に流れている しをりながら寝はん 琴を鳴かしてすすめどい

右に左に流れている 右に左に流れている

鐘鼓樂之 鐘鼓樂之 鐘鼓樂之 鐘鼓樂之

鐘鼓樂之

鐘鼓樂之

高く低く伸びるあやこも 右に左に流れている しをりながら寝はん 鐘を大鼓で

右に左に流れている 右に左に流れている

A 結婚式の祈い歌

B 祖靈の禱い歌

萬葉集卷第一

雑歌

泊瀬朝倉宮御宇天皇代 大泊瀬稚武天皇

天皇御製歌

籠毛与 美籠母乳 布久思毛与 美夫君志持

比岳尔 菜採須兒 家告奈 名告紗根 虚

見津山跡乃 國者 押奈丹手 吾許會居 師吉

名伴手 吾己會座 我己會齒 告目 家呼毛

名雄母

籠は美しい籠、ふくしもなんと美しい。

この岡で、若菜を摘んでいる娘さん、

わたくしと結婚して下さい。わたくしは

天みつ大和の國の支配者。大和の國は

すみからすみまで、わたくしの所有だ。

わたくしの方から名乗りませう。家も

名も。

泊瀬朝倉宮に天下を治める天皇、
大泊瀬稚武天皇、天皇みずから

作った歌。

『万葉集』巻第一の歌

ワカタケルのミコト
雄略天皇

古代では名を呼ぶことが
男に女に名を呼ぶことは
求婚の意をまはらした。